

## 統合と発展

高橋 正

日本数式処理学会会長

会長に就任すると最初に発行される学会誌「数式処理」に理念とか、基本方針などを表明することになっています。しかし、私としては崇高な理念や方針を述べる技量はありませんので、細やかな期待を示したいと考えます。

学会誌「数式処理」VOL.18, NO.2の発送において、日本数式処理学会創立20周年記念CDが同封され、会員の皆様のお手元に届いたことと思います。学会創立当初は、現在のような分科会もなく、いくつかの少人数での研究会の開催から始まりました。したがって、学会は未分化な状態であり、お互いが専門的知識の繋がりを模索する状態でした。

学会が成長し学会の社会的位置付けとして学術団体を経て一般社団法人化を果たしました。これらは、歴代の学会執行部をはじめとする学会員の皆様の協力により支えられてきました。そして、会員個々の研究の発展および新たに参入した会員の多様化により、学会は分科会制に移行し、組織として分化しました。

そして今、学会は、統一的なビジョンを備えた発展を求められる時期にきていると考えられます。「未分化、分化、統一」という言葉は、様々な分野で用いられますが、集団において考えれば、初期状態からある程度の組織が芽生え、それが各機能を有し、それらがお互いに効果的に機能して全体が成長することを表した言葉です。日本数式処理学会は、数式処理の進歩・発展・普及を図ることを目的とする組織です。現在の4分科会が、どのようなビジョンを設計し、それらを全体的視野でお互いに発展させるかが大きな課題になると考えられます。

数式処理は論理的に整合性があることが大前提です。次に、数式処理は、システムが存在してこそその数式処理です。システムの構築やその応用は重要な実践と位置付けることができます。これらの活動を4分科会が担っています。日本数式処理学会は理念を達成するための研究と、その成果を活かした諸活動を行っています。本会の趣旨をご理解いただきより一層のご協力・ご支援をお願い申し上げます。

尚、昨年3月11日に発生した東日本大震災によりお亡くなりになられた方々に対し謹んで哀悼の意を表するとともに、現在も過酷な状況に置かれます被災者の皆様のご健康と一日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。